

分科会15

地域で必要とされるACT の立ち上げ方 ～ ACT で楽しく苦勞する～

出演者：津坂治男（訪問看護ステーション ACT-J 利用者）
佐川まこと（この会（鴻巣市 心の健康を守る家族の会））
渡辺 乾（訪問看護ステーション KAZOC）
片倉知雄（旭中央病院こころの医療センター CMHT）
岡崎公彦（岡崎クリニック）
司会：増子徳幸（訪問看護ステーション ACT-J）

この分科会では、徐々に日本で広がりを見せているACT(包括型地域生活支援プログラム:全国 19ヶ所)について情報発信とシンポジウムを実施して、「地域で役に立つ」「必要とされる」ACTであるためにどのような事がポイントとなるのか？ について議論を深めました。まずは5人のシンポジストから発言をいただき、休憩時間に参加者よりご質問を書いていただき、後半に発表者がそれにお答えする形としました。

● 5人の発言者とそのポイント

①サービスを利用している利用者: 本人の話聞く事が大事、薬をのみたくない人には無理強いしない、自分で体験して自分で必要だと思う事が大事。支援者にはそれを待つ姿勢が必要。

②家族: 家族支援をプログラムの中に位置づけ時間を割いて、しっかりと家族と向き合う中で、家族の心理的負担が軽減し、家族が前向きな気持ちになることが9家族の調査で判明。今、ACTが家族と問題を共有し、伴走する事が家族の希望につながるという事実を全国の家族、当事者に発信することが大切。

③訪問看護ステーションの立ち上げスタッフ: 「誰もが住みやすい地域を作る事」が目標だが、スタッフ間のストレス視点の共有は難しく、地域の支援体制の未熟さもある。当事者を主体とした「緩やかなつながり」を作りだす事を目指して活動を進める。

④病院からのACT実践者: 地域の相談支援事業を実施している拠点と密に情報共有し、連携をする事によって重症の方を支える事が可能になっている。連携のためのコツを紹介。

⑤地域のクリニックからのACT実践者: 行政や周囲の支援機関と高度な連携をする事が必要。関係機関と顔と顔の関係で話を聞く事と、同時にACTの理念を伝えていかねばならない。

● 参加者（70名程度）からのご質問の一例

「ACTを実施して採算は取れているのか？（往診してもらえるDrを探している）」

「関わり始めで苦勞する事は？／訪問拒否に対してどうする／危機介入の見極めが難しい」

「多職種チーム内の連携について、苦勞している事や工夫している事は？」

「地域の施設とどのように連携をしているのか？／卒業先はどうなるの？」

「地域の一般市民への理解の伸展のために、何をすべきか」

● ACTひいては精神科訪問支援に関する情報発信について

ACTが日本で始まって11年目となりました。これまで関係者は様々な機会を捉えて情報発信に努めて参りましたが、参加者の皆様から例年同じようなご質問が出る状況を鑑みる時に、情報発信・共有が量・質共に不足している現状を痛感致します。訪問支援に携わる支援者のネットワークや事業所単位で戦略的に情報発信する事が求められているのだと思いました。

《増子徳幸（訪問看護ステーション ACT-J）》